

## 学部長インタビュー

# 文明を創る新しいルールを

## 「自然と人間の共生」「人間と人間の共生」を基本理念に 地球規模の課題に積極的に関わる総合政策学部

「共生」とは、もともとは生物学から出てきた言葉ですが、社会科学的な意味では、長い期間をかけてともに生きていけるというようにとればいいのかと思います。相手を破壊してしまうのではなく、よりよくお互いに生きていけるということです。自然と人間の関係でいえば、自然環境を破壊し尽くしてしまうような関係は、一時期、せいぜい100年や200年はいいかもかもしれませんが、決して長い期間続く関係ではありません。持続可能な共存関係が大切なのです。人間と人間の関係でも同じですね。征服、被征服という関係では、長い期間、お互いにいい状態で共存できないですね。

そして最近になって急に、こういう考え方の人材が必要だと気づきはじめたのです。たとえば企業の環境管理部。ここは従来、公害対策として、有害物質の種類とか、その排出量管理などをしてきましたが、企業と社会との関わりを中心に据えるような環境管理をちゃんとやれる人は少ない。今までは新しい技術で過去の技術の問題を克服していくという、技術主体の考え方でした。技術を変えていくことは必要ですが、社会全体のシステム自体がどこかおかしいとする視点が重要なんです。

いまの社会をこのまま続けていって何十年先までもつかどうかと言うと、いまのままではもたないのです。そういう見方ができる人。もたないから技術を変えようかと言っても、いままでの技術では限界があるのです。技術開発をしてきたけれども、やっぱりうまくいかなかった。いくら技術を新しくしても、ゴミはやっぱり溜まってしまったわけですよ。文明を創り上げるルールを変

える、そんな新しい発想を持った人が求められています。これからどんどん必要な人材でありながら、いままでどこも育ててこなかったのは、むしろ不思議ですね。



ここ10年ぐらいのことですが、世界的な政策課題として、地球環境問題をはじめとした人口、食糧、健康、都市形成などが、クローズアップされてきました。環境と人間との関係が非常に重要な政策課題として出てきたのです。ただ、人間社会と自然環境の間に存在する複雑な相互関係を含めた政策課題は、従来の学問領域だけではどうしても無理があったわけです。一方、この時期に、世界規模・人類規模の政策課題に取り組んでいこうとする世界的なある種の方向付けがなされたのです。 「持続可能な発展」という概念ができあがってきていたのです。

そこで学際的、総合的な教育を行える学部が必要であり、社会科学系の分野を総合しようとしていたのです。既存の学問で蓄積されている成果をさらに横断的に広げ、学際的に統合して、具体的な政策の立案と実行をめざす学部、総合政策学部を考えました。関西学院大学の伝統のいいところを受け継いで新しいものを付け加えてできていく感じですね。総合政策学部という名前を使っていますが、環境、自然、これらの相互関連で人間社会を考えます。世界的にもこういった性格の学部はユニークだと思います。

総合政策学部は、自然環境、その中の人間社会がつくる社会経済システム、さらに人間社会において歴史的に形成される言語・文化の体系、と

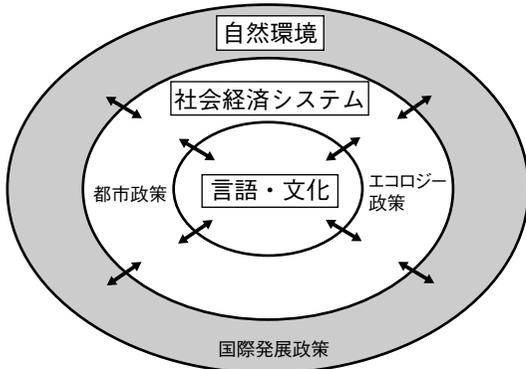
いった三層からなるエコシステムを学問対象としてしています。さらに生物生態学の方法を社会科学に応用したヒューマン・エコロジーを考え方の基礎において、政治学、経済学、社会学、さらに工学までも含めた、従来の科学を総合的に組み合わせ、問題解決に向けての政策立案をめざしています。エコシステムの3つの層を縦軸に、そして横軸に経済学とか法学とかを横断的にイメージしていただければいいかと思います。こうした横断感覚的な発想が、これからますます必要とされるでしょう。

●

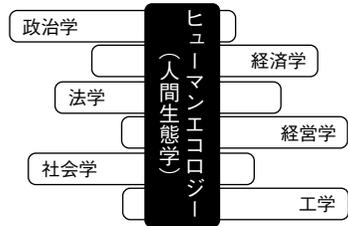
広域な学問領域ですから、多彩で個性のある先生方に集まっていたいただきました。従来の大学の場合では考えられないような経歴の方も多いのです。たとえば、元国連大学副学長、国連経済社会開発局官房長、建築家でニュータウン開発のパイオニア、通産省・科学技術庁・環境庁などの行政官、外務省経済協力開発機構の日本政府代表部一等書記官を経験された方、弁護士でNGO日本代表など、残念ながら紹介しきれませんね。こういう先生方に積極的にぶつかって行って、生き方などが吸収できる、これはすばらしい経験になるはずですよ。先生と学生との関係も、フレンドとか同僚という感じになるでしょう。

また、総合政策学部の約45名の教員スタッフの約4割は、外国の方です。また日本人の方の約半数は、海外で長く活躍されてきた方です。学際的

■総合政策学部の基本構成  
—エコシステムの三層構造—



■人間生態学の略図



な色彩の強い領域での実績を重視してスタッフを選ぶと、結果的にこうなったわけです。加えて、価値・言語をしっかりと身につけておくために、実質的な国際語である英語を身につけられるメリットもあります。英語しか話せなくて、英語でしか授業ができないといった先生方も何人かいて、こうした先生の授業も学生は実際に受けなければならないわけですからね。言葉は、伝達手段であると同時に、言葉そのものが考えであり、考える道具です。考え方のバイリンガルもねらっているのです。

また、情報においても同じことが言えると思います。従来ですと、本の活字から情報を得て、文字を書いて考えていました。ところが現在、絵や音などの情報伝達ができるようになると、高度情報化社会の考え方とか文法とかをこの学部で身につけてもらいたいものです。英語と情報は新しい工夫をして、他の大学では真似のできない内容になっています。

外国人の先生も多いですが、帰国生や留学生の比率も高くなっています。また、新しいキャンパスは、広々としていて美しくオープンな雰囲気があふれています。好奇心が強い、自分の意見をもちたい、それを伝えたい、いまはなににもないが、4年間で身につけられる何かを探したい、つまり時代に積極的に関わって行きたいみなさんには、すばらしい環境じゃないでしょうか。